

---

# Re:Mabe Blue

黒田むつみ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Re: M a b e B l u e

### 【Nコード】

N 7 4 3 3 K

### 【作者名】

黒田むつみ

### 【あらすじ】

10年前の初恋の相手に偶然会ってしまう二人。自分自身を好きだった頃思い出させてくれる初恋相手。二人の二回目の初恋物語

## 再会 1 (前書き)

小説初執筆となりますので、大変稚拙な文章になってしまおうと思いますが正直な感想など頂けると幸いです。

## 再会 1

仙台発21時55分の東北本線下りの電車。

名古屋から仙台に転勤になり二ヶ月。毎日のように残業に追われ、帰りはこの電車になるのが常だ。ただ、実家から通える距離なので自宅に帰ってからの家事をする必要がないので楽とは言え、やはり自宅の最寄駅から仙台駅までの片道約40分の時間が惜しくもある。発車まではまだ10分ほどある。僕は電車に乗り込んで空いている席にいつもの具合に座り、携帯電話を操作しているように装い発車を待った。明らかに冷静ではないことは自分でもよく分かる。

つい数分前の出来事だ。仙台駅の二階正面の改札口を通ろうとした時、何気なく視線を前にやると一番線のプラットフォームに降りていく彼女を見かけてた。彼女を見たのは成人式以来だから4年ぶりだ。電車に乗り込む際に細心の注意を払った。彼女らしき人物が乗っていない車両を選んだつもりだ。そして、今だって顔を下に向け携帯電話の画面を覗きこんでいる。見つけれられないようにというよりも心情的には隠れていると言ったほうが近いかもしれない。

彼女のことを嫌いな訳じゃない。ただ、彼女と会ってしまうことが怖かった。それまで蓋をしてきたある感情を自分で認めてしまうのが怖かった。

腕時計に目をやると3分進めてある時計が21時56分を指している。

「よし」  
発車まではあと2分。そう思った瞬間に小さかったが思わず声を出してしまった。

なんとか隠れきった。これが正直な気持ちだろう。安心しきった僕はバックからシステム手帳を取り出し明日の仕事の予定を確認し始める。だが、彼女のことを完全に頭から消えた訳ではない。とはいえ、徐々に平静さを取り戻している。冷静になって

考えてみると、僕の危惧していたことが起こりうる可能性が低いことに気づいた。、数年前のことになるが大学生の頃、帰省した際に友達に会う為仙台行きの電車に乗った時のことを思い出した。その時、たまたま彼女も同じ電車に乗っていた。席もお互いを確認できている距離だったが話しかけてくることはなかった。成人式の時もそうだ。あんな小さな町の成人式でも話すことはなかったんだ。お互いに持ち合わせている感情は違えど、顔を合わせたからといって話しかけづらい相手であることは一致している。そう思えば、より一層の安心感が得られた。

隣に誰かが座った。システム手帳を見ている僕の視界の左側に黄色いバックが飛び込んだので反射的に前傾気味だった姿勢を少しだけ起こし、左を見た。

すると、少し恥ずかしそうにはにかみながら「久しぶりだね」。  
10年前の初恋の彼女が座っている。

## 再会 2

「おお、久しぶり」

僕の返答が合図のようにして電車が動きだした。

突然の彼女からの挨拶に一瞬にして体中に緊張感が走った。

つい一分前だ。自身であり得ないと決め付けた事が事実、今ここで起きてしまった。

「仙台で働いてるんだ？」

「そうなんだ。ちよっと前に転勤で戻ってきてね。君も仙台で働いてるの？」

「うん」

仕事柄、初対面の人と話すことは慣れていてよかったとこれほどまでに思ったことはない。まだまだ、始まったばかりだが彼女との会話を成立することができている。

ただ、彼女のことを「君」と呼んだことはこれが初めてだ。話をするのが10年ぶりなのだからある意味全てが初めてのようなものなだけけれど、無意識ではあったがこれにはちゃんとした意味がある。僕はあまり親しくない人に対して君と呼ぶ。

彼女に対して一定の距離を保とうとしている。勿論、それは自分を守るためだ。

それから僕たちは当たり障りなくお互いの仕事の話を進めた。

彼女は今、老舗の日本茶のお店で販売員をいっているとのことだった。最近はお茶よりも抹茶の大福餅が好評で全国的にも有名になったあの日本茶屋だ。

「義徳さんは、営業マンかあ。なんだか、あの頃からは全然想像つ

かないなあ」

そう言うと彼女はいたずらっぽく笑った。

彼女に名前を呼ばれたのは実に10年ぶりだ。そうだった、あの頃も彼女は僕のことを「さん」付けで呼んでいたんだ。付き合っていたにもかかわらず。

「そうだな、自分でもまさか営業職につくなんて、あの頃からじゃ想像がつかないなあ」

「うん」

「そうあっさり、うんって言われちゃうとなんだかなあ」

「ごめん、ごめん。別に悪気はないんだけど。ほら、義徳さんてさ野球している時は別だけど、それ以外の時ってクールだったから」  
「そんな風に見えてたんだ」

彼女が今どう思っているのかは知らない。けれど、いつの間にか僕は緊張しつつもこの時間が楽しくなっていた。そうだ、あの頃と一緒だ。彼女にふられる、あの日まで僕はいつもこうだった。いつもドキドキしながら彼女と喋ってたんだ。

あつという間だった。たわいもない話をしているうちに電車は僕たちの降りる駅に到着した。

二人で改札口を出たときだった。

「ねえ、携帯のアドレスと番号教えて」

「ああ」と返事をしておもむろに携帯電話をスーツのズボンのポケットから取り出し、お互いの電話番号とEメールアドレスを交換して僕たちは別れた。

## ポスター

家に着いたのは22時40分を少し過ぎた頃だった。

自分の部屋へ行きスーツを脱ぎジャージに着替えてから夕飯を食べる。いつもであれば、携帯電話を自分の部屋のテーブルの上にある充電器へセットしてリビングに移動するのだけれど、この日は淡い期待を抱きながら携帯電話をジャージの上着のポケットに忍ばせリビングに向かった。

僕は遅い夕食を食べながら、中学時代のことを振り返っていた。

僕は中学二年の途中まで恋愛というものに全く興味がなかった。そのせいか、あの子が好きだとか誰に告白したかの、された話の話題で盛り上がっている周りとはどうも同調できていなかった。

たとえば、その話題の当事者になることがあってもそれは変わることはなかった。僕に対して直接なり手紙なりで「告白」してくる女子は何人かはいた。そういった彼女らの思春期時代の一大イベントを僕はことごとく退けてきた。

理由は簡単だ。皆がしているから私もといったような流行で告白してきているように感じたし、何より自分の興味のないことに時間を奪われるのが嫌だった。

だが、それが一変する時がくる。

中学二年生の二学期の秋口、気づくと僕は初めて異性のことを好きになっていた。周りに比べると随分遅かったと思う。

相手は隣の席の彼女、赤平久実。

容姿は背丈は低かったが、肌の色がとても白くショートカットの髪型がよく似合うかわいらしいという表現がぴったりだ。

そんな彼女と席が隣になり少ないながらも会話を交わすうちに赤平久実という人間に徐々に興味が沸いてきた。



しっかりと自分の考えを持っていて、周りや流行といった思春期の中学生が一番弱いものに流されるようなことは無いように見えた。

そんな中で、事件が起きた。二学期も終盤の12月の下旬だ。

僕は部活を終え、帰宅したあと夕食前にランニングすることを日課にしていた。距離にして10キロほどだ。途中で公園があり、公園の前には掲示板があるのだけれどその掲示板には歳末たすけあい運動のポスターが貼ってあった。

ポスターにはなんと優しい表情を浮かべた女の子の絵が描かれてあり、見るものすべてを穏やかにさせてくれるような、そんな印象さえ受ける。僕はランニング途中にこのポスターを見るのを密かな楽しみにさえしていた。

ある日、その公園の前までくると掲示板の前に人の気配を感じた。どうやら掲示物をはがしている。僕は別に気にもせずその掲示板の前を走り過ぎようとした。

向こうはこちらに一瞥もくれずに歳末たすけあい運動のポスターを留めてあった画鋏の最後の一つを取ろうとしていた。

顔をこちらにこそ向けなかったが、それをしていた人物は赤平久実だった。

それが決定的だった。

いくばかりかの悔しさがある。

実は、僕も密かにあのポスターを貰おうと思っていた。大晦日になればあのポスターの役目も終わるのだから大晦日にランニングの際に途中で頂いて帰ろうと企てていた。残念だが、彼女に先を越されてしまったが悔しさよりも嬉しくて仕方がない。

あのポスターを好きだけでなく、盗もうと考えていた人間がもう一人いたなんておかしくてたまらない。それもそれが彼女だなんて。

僕はこれがかっかけて彼女を好きだという気持ちを自分でも認めざ

るを得なくなっていました。

## 消しゴム作戦

冬休み明けの一月。

僕は彼女ともっと喋りたい、いや正確には彼女に気に入られたい、あわよくば彼女が自分のことを好きになってくれないかとさえ思うようになっていた。

勿論、隣の席であるので全く喋らない訳ではない。しかし、積極的に話をする訳でもなく必要なことだけを交わすだけというような会話だ。いや、なんだか会話をする機会は二学期よりも確実に少なくなっていた。

理由は、僕が意識するあまり何をどんな風に話しかけて良いのか分からなくなってしまうたのである。勿論そんな調子だから、彼女から話しかけられても嫌われたくないという思いが先行してしまい、言葉に詰まったりしてしまっていた。彼女との距離を縮めたいという持ちながらも、その思いとは裏腹に逆走を重ねていた。

誰かに相談できていたら、もっと早急になにかしらの手を打っていたのかもしれないけれど、なにぶんプライドの高い僕は誰かに彼女のことを好きだとも打ち明けられることができずに三学期を最悪のスタートを切った。気持ち的には開幕泥沼連敗スタートというスポーツ新聞の見出しがよく似合う。そんな感じだった。

僕だって、ただその現状をただ、やすやすと見過ごそうと思っていただけではない。

毎日のように、家に帰ってからは明日はこんな話題で話しかけてみようかとかそんな作戦を練っていた。しかし、その作戦通りにことが進む日はなかった。

一月も下旬にさしかかろうかとしていた日の授業中だった。

彼女の机から落ちた消しゴムが自分の席の方に転がってきた。僕は

すかさず拾いあげ彼女に渡した。

「ありがとう」

「別にいいよ」

実に短い会話だった。

僕は急に閃いた。これだ！！

上手く会話できないのならこういうシチュエーションを増やせば自然と話をする事ができる。たとえば、それが短い会話であっても僕にはそれでも一歩前進だ。そう思った。

それから数日、僕は彼女が机から鉛筆や消しゴムが落ちないか集中した。

やはり、そう簡単には彼女だつて落とさない。多くても一日二回が限度だった。落ちる物が必ず僕のほうに転がってくるわけではなかったが、以前よりは話す機会は増えている。

僕にも欲が出てくる。もっと喋る機会が欲しい。

そこで今度は僕が消しゴムを落としてみることにした。常に消しゴムを机の右側に置くようにし、頃合を見計らって右ひじを自然に当てるようにして消しゴムを彼女の席の方に落とした。

自分でコントロールしているとはいえ、見事に彼女の座る椅子の下に消しゴムが転がっていった。

彼女が僕の消しゴムを拾い、僕に渡してくれる。

「ありがとう」

「ううん、いつも拾ってもらってるから」

「そうだっけ」作戦が気づかれてはまずいと少しとぼけるように答えた。

彼女は笑みを浮かべ、再度顔を黒板に向けた。

作戦成功。

僕はこれに味を占め「消しゴム作戦」と銘打ち、一日一回までと決め作戦を実行し続けた。勿論、彼女の机にも集中していた。

そんなことを始めてから一週間が過ぎた頃、短い会話を重ねるうちに徐々に彼女と自然に話をするができるようになっていた。

一月ももう終わりを告げようとしている。

## スパイラル

朝を迎え、朝の満員電車で揺られている。  
結局、昨日は彼女からメールがくることはなかった。

特別な期待をしていた訳でもなかったが、やや寂しさがあるのは正直なところではあるが、むしろ安心した気持ちのほうが大きい。  
これは今までも何度か経験している。旧友などと久々の再会を果たした際に、その後実際に連絡を交わす可能性が低かろうということはお互いに承知の上だが、別れ際には連絡先を交換する。一種の名刺交換のようなものだ。僕は認識している。彼女のそれも、同じなんだということに僕は安堵しているのだ。

そもそも今更、彼女との再会なんて、ただただ迷惑なだけだ。ようやく彼女のことを意識せずに生活を送れるようになったというのに。

僕は十年間、彼女に苦しめられた。

中学生の恋愛というものは周りの友達の話を聞くうえでどんなものなのかは理解していたつもりだった。実際に想いを告げ、ふられたばかりだと思っていた友達。翌月には今度は「あの子のことが気に入っているんだ」と聞かされることもあったので、自分も時間が経てば違う子を好きになるんだろうなと思っていた。

しかし、どんなに待っても僕にはそれが訪れることはなかった。

自分の中にはいつも赤平久実がいた。

焦りも多分にあり、高校生の頃は自分を好きだと言ってくれる女子何人かとも付き合ってみたりはしたが、それは自分を苦しめることになった。どんなに相手のことを好きになろうと頑張ってみても自分の望む結果は得られず結局は相手を傷つけ、知らない間に自分

を傷つけてしまうという悪循環におちいった。この頃、初めてのセックスを経験するが自分にとって周りの友達が言うように相手の息遣いすらまでをも覚えていってしまうというまでの思い出ではなく、あくまで初体験というだけである。それ以下でも以上でもない。

とはいえ、僕はある種の期待をしていた。何せ言葉は古いが契りを交わすという表現がある程の行為であるから、それまで自分が知らない神秘性とやらに感化され相手のことを劇的に想うことができるんじゃないかと世思っていた。しかし、それは幻想であったことにすぐに気づかされた。

ちょうどこの直後からだろう。僕は異性に対し期待するのは辞めた。

大学生にもなると随分と割り切るのが上手になってきた。

僕に近づいてくる異性に対して気持ちがあるようには見せかけては「恋愛ごっこ」を楽しんだ。勿論、満たされることはなかったがそれでも誰かには近くに居て欲しいと思うようになっていた。

せめて体だけでも満たしてほしいとさえ思っていた。許されるわがままの範疇だとさせ感じていたくらいだった。

どんなに好きになってくれても、好きにさせてくれる女性はやはり居なかった。

## 腫れ物

初めて彼女からのメールが届いたのは、再会した二日後のことだった。

仕事を終え仙台駅へ向かう途中、スーツのズボンのポケットに入れていた携帯電話が鼓動した。

お疲れ様。

今日は何時の電車で帰るの？こないだと同じ電車なら一緒に帰らない？

それとも、もう帰っちゃったかな。

久実

初めはもう帰ったとメールしようと思った。

けれど、降りる駅も一緒ということを考慮すれば嘘がばれる可能性もあった。次の電車は40分後だし、明日も仕事だからできるだけ早く帰りたいところだ。仕方なしに、彼女に受諾のメールを送信した。

待ち合わせは仙台駅二階の伊達政宗像の前だ。彼女はまだ居ない。一体、彼女はどっいうつもりなのだろうか。考えても答えは出ないが、そんなことを考えて彼女を待った。

5分ほど待った頃だった。

「ごめん、待たせちゃったかな」

そう言いながら、彼女が来たのは電車の発車時刻の10分前だった。

「いや、俺も今着いたばかりだから」

「そっか。じゃ行こうっか」

「うん」



改札を通って電車に乗車し、ちょうど二人分席が空いていたところがあったので座った。

「今日も残業だったんだ？」トートバッグからペットボトルのウーロン茶を取り出しながら彼女が聞いてきた。

「そうだね。毎日大体この電車になっちゃうんだ。君も残業だったの？」

「うちはシフト制だから、今日は遅番」ローウーロン茶を口に含み喉を通したところでそう答えた。

「そっか」

「懐かしい。『そっか』中学の頃もよく、そっかって言ってたよね」彼女は笑みをこぼしながらそう言った。

「癖つてのは、なかなか直らないね。よく君に注意されたの覚えてるよ」

「そうだよね。よく言ったかも知れない」

当時、僕は彼女とよく話すようになってから緊張のあまりどうにかひねりだす「そっか」という相槌を打つことがあまりに多かった。

その為、人の話をあまり聞いてないように聞こえるからと、よく注意されていた。

「そうだ、あれもあの頃のまま？」

「あれって？」僕は訝るように聞いた。

「梅干まだ食べれないの？」

「勿論」

「よかった」

「よかったって？」

「変わってなくてだよ。義徳さん私のこと、この前会った時から『君』って呼ぶから随分と変わっちゃったなと思ってたんだよ。でも、変わってないところもあるんだと思ったら、なんだか嬉しくって」

「君って呼ぶのは新しい癖だね」

「うーん、それは別に悪い癖じゃないけど、昔からの知り合いには方がやめた方がいいよ」と少し顔を困らせながら言った。

「そっか」

「また言った。『そっか』」ちよつといたずらっぽく彼女は笑った。「それにしても、よく昔のこと覚えてるね」これは僕の素直な疑問だ。僕が彼女のことをよく覚えているのは当たり前だが本当に彼女もよく覚えている。

「あの頃が一番楽しかったからね」

「あの頃が一番なんだ」それは僕もだ。中学二年生から三年生になって彼女にふられるまでの間が一番楽しかった時間だった。

そんな話をしているうちに駅に着き、僕らは今日も改札口を出たところで別れた。

それからも彼女が遅番の時は一緒に帰ろうと誘われることが度々あった。僕自身、彼女と交わす中学時代の思い出話を楽しかったので断る理由はなかった。二人ともよく当時のことを覚えていて話は盛り上がっていた。けれど、お互いに付き合っていたことを口にすることはなかった。

そこに触れることが一種のタブーのような、それを口にする事で今の関係性が崩れてしまうようなそんな感覚が少なからず僕にはあった。

## お釈迦様

部活の練習後、忘れ物に気付き、着替えを終えてから教室に戻った。教室に入ると担任の梶原先生が掲示物の張替えをしていた。

「あら、どうしたの」

「ちよつと忘れ物しちゃつて。それ取りに」彼女は教師になって二年目の新米教師で、10歳しか離れていない。そのうえ一年の時も担任教師だったせいかわ原先生とは親しく接していた。何よりも自らを「先生」と自称することがなかったので、僕はそれだけで彼女に対して好印象を抱いていた。

「義徳君が忘れ物なんて珍しいね」笑みをこぼしながらそう言い、手を休めた。

「たまには忘れ物くらしいですよ」僕は自分の机から数学の教科書を取り出し鞆にしまった。

「そうだ」先生は急に何かを閃いたかのような大きな声でそう言った。

「どうしたんですか？」

「私気付いちやつた」

「えっ。何を？」先生の不適な笑みを訝るように恐る恐る聞いた。

「義徳君さ赤平さんのこと好きでしょ」

「えっ」僕は一瞬、何を言われているのか理解できず頭が真っ白になつてしまった。

「やっぱりね。分かるんだよ。教卓からはよく見えるんだから」その言葉とは裏腹に先生の表情には嫌らしさが微塵も感じられない。何か大きな存在に感じた。心の中まで覗きこまれているようなそんな印象だ。

「いつ気付いたんですか？」観念したかのように、先生の問いを認めつつ、僕のどこに落ち度があったのかを聞いた。

「そうね、確信を得たのは三学期が始まってすぐくらいかな」全く

うそぶいている様子はない。『消しゴム作戦』を決行する前から気付かれていたことになる。

「そっか」

「義徳君てさ、今まで女の子に興味ないような感じだったから、だから余計に分かりやすかったのかも。だてに担任二年してるって訳じゃないんだよ」そう言うと、ちよつとだけ誇らしげに笑ってみせた。

「誰にも気付かれてないと思ってたんだけどな」正直な感想だ。

「もしかして初恋？」

「うん」既に鳥かこの中の鳥のような状態だ。

「そうなんだ。なんだか羨ましい」そう言った後だった、先生は僕の秘め事を見破ったことに対しての償いという訳ではなかったんだろつが、自身の中学時代の話をしてくれた。

先生は中学時代に同じクラスの男子を好きになったそうで、その彼とは元々親しかったらしい。もしかしたら彼も自分に好意を抱いてくれているのではないかと思っていたようで、バレンタインに意を決して直接チョコレートと手紙を渡し想いの全てを告げた。しかし、彼からは何の返事もなくその後、卒業するまで彼とは顔を合わせるのもなんだか気まずくなってしまうたという失恋の話であった。

それでも先生は告白したことを全く後悔していないと言った。勿論、直後は大変シヨックだったとも言っていたが中学時代のいい思い出と笑ってさえた。

「告白していなかったら後悔していただろうな」そう言った先生の言葉が妙に耳に残った。

その日の帰宅後、僕は先生になぜ見破られてしまったのかを考えていた。自分の行動を逐一思い返してみても、そんなそぶりをみせていたとは到底思えない。『消しゴム作戦』で見破られたのならまだ理解できるのだけれど。どんなに理由を探ってみてもやはり分からない。先生は神様なのかというふうにさえ思い始めた頃、中学の入

学式後の初めてのホームルームのことを思い出した。まず、はじめに先生の自己紹介があった。名前と年齢を言ったあと

「誕生日は4月8日です。実は今日が誕生日なんです。あの、お釈迦様と一緒になんですよ」とちよつとだけ冗談めいたように笑いながら言ってみせた。

そうか、先生はお釈迦様の生まれ変わりなのか。ならば分かれてしまっても仕方がない。そう理解することが一番納得できた。そう自分で結論付けると、先生の中学時代の話を思い出した。すると、あることに気付いた。来週はバレンタインデーがある。確かに最近になって彼女とは以前よりは自然に話せるようにはなってきた。いるものの、それもここ一週間程度のことだ。まさか、そんなことがあるわけがないとは自分を鎮めつつも、もしかしたら義理チョコくらないならという淡い期待が生まれてきた。僕からすればそれだけでも満足だ。そんなことに想像を膨らませ始めた。さつき点けたばかりのスピーカーから流れるFMラジオはすでに耳には入ってこない。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7433k/>

---

Re : M a b e B l u e

2010年10月14日02時19分発行